

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

みんなの声を「署名」にのせて届けよう! 子どもたちに当たり前の教育を

支援学校の建設と 設置基準策定を求める学習会

6月15日、支援学校の建設と設置基準策定を求める学習会(主催:6者懇)が開催され、府内各地より父母・教職員・障害者団体関係者など50人が参加しました。大障教からは22人が参加しました。

前半は、保護者・教職員から各地域や学校の現状について報告されました。後半は、ミニ学習会として、石川たえさん(日本共産党大阪府議会議員)と山下よしきさん(日本共産党参議院議員)が支援学校増設と設置基準策定について、府議会と国会の状況をまじえて報告しました。

「設置基準の策定」「支援学校増設」を求めよう

開会あいさつでよくする会会長の岩田美穂さんは、「支援学校にだけ設置基準がないということ」を最近知った。障害があっても、豊かに学び成長する権利がある。生活圏域・福祉圏域をとともにする仲間と、地域に根ざした学校生活を送れるよう、府立支援学校の建設と特別支援学校の設置基準の策定を求めたいと呼びかけました。



パネルを使って報告する
山下よしき参議院議員

各地域・学校からの報告では、「新設された枚方支援学校はすでに『過大・過密』でいっぱい。今回の『通学区域割変更』で枚方の子どもが地元の支援学校に通えなくなる。設置基準の策定を求めて若いお



お母さんの発言に心打たれました

母さんたちといっしょに署名をがんばりたい(稲垣恵子さん)、「四條畷校は特別教室などもしっかり整備されておらず、子どもたちの環境は劣悪。いつ閉校になってもおかしくない学校に、また新たに子どもたちが入ってくる。支援学校にだけ『設置基準』がないのは、国が障害のある子を『差別』している(鈴木浩司さん)、「岸和田・泉南地域に学校が足りない。安易な校区再編で問題を片付けず、私たちの

障害児の学ぶ権利が保障される政治に向かって前進を

石川たえ府議会議員は、「吉村知事がマスコミを使って、支援学校の新設に力を入れるように宣伝しているが、基本方針で前から決まっていたこと。自分の手柄のように印象操作をしている」と厳しく指摘し、障害者差別解消法や憲法の理念が生かされるようともにがんばりましょうと語りました。

山下よしき参議院議員は、

3月の参議院予算委員会での「特別支援学校の設置基準策定」の問題について取り上げ、「過大・過密」の実態について安倍首相の認識をたどりました。安倍首相は「政府として、現状は把握している。この現状を放置するという考え方は全くごいけません」との答弁を引きだしたことを紹介しました。政治の場に身を置くものとして、みなさんといっしょに障害のある子どもたちの学ぶ権利が保障される政治に向かって前進していきたいと語りました。

声や子どもたちの声に耳を傾けて本当の教育環境の充実を考えてほしい(清時綾さん)、「地域の支援学校も子どもが激増している。安上がりの障害児教育に終わらせず、障害児の発達にふさわしい場となる支援学校・学級の増設が求められる(山林哲さん)、「支援学校には小中高一貫教育が必要。障害があっても一人の人間として、当たり前の教育環境・教育条件で教育を受けさせてあげたい。私たちの声を署名にのせて議会にとどけましょう(中川真早実さん)など、学校現場の現状や「設置基準」の問題点、保護者の切実な願いが報告されました。

大障教ホームページアドレス <http://fc06331220171211.web2.blks.jp/> Eメール アドレス : fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp



自分の感受性ぐらゐ、自分で守ればかものよ

茨木のり子さんの「自分の感受性ぐらゐ」という詩の最後の三行だ。茨木さんは一九二六年六月に大阪で生まれた。私がこの詩に出会ったのは高校二年生。学期途中に赴任してきた社会科の臨時教員が授業で教えてくれた。もちろん授業内容には関係ない。

月日が流れ、この詩に再度出会った。それは、二九歳の時に参加した全国臨時教職員問題学習交流集会(全臨教)だ。配布された資料集の巻頭に「自分の感受性ぐらゐ」が収められていた。「あの先生もこの集會に参加していたのかな」と考えた。以来、茨木のり子さんの詩集を買い求め、現在も手元に数冊ある。その中の一冊「歳月」は彼女の遺稿詩集だ。「鎮魂歌」に収められた「汲むーY.Yにー」を読み返し、「すれっからし」にならないようにと思ひ続けてきた。

今夏、「全臨教」第五〇回記念集會が千葉県船橋市で開催される。

学生時代、授業で様々なことを学んだが、授業に関係のない「周辺の事柄」が記憶に残っている。社会科の臨時教員が教えてくれた詩が、ある生徒のその後の教員人生における気持ちを立て直すひとつの力になった。その先生も、茨木のり子さんの詩で気持ちを立て直しつつ生きていたのではないだろうか。

教育行政は「授業力」を強調する。それは「校長の学校経営計画」実現を目的とした循環サイクル(PDCA)に位置づく。要するに「視点の中心人物」は校長で、子どもが主人公ではない。「子どもの記憶に残る授業」とは、いったいどんなものだろう。(久)

大障教定期大会 発言ダイジェスト(その3)

一刻も早く学校看護師の雇用条件改善、定数外配置を！

箕面支援学校分会 藤嶋代議員



箕面支援学校は、知肢併置の学校です。地域には大規模な医療機関が複数あり、重度の心身障害児在籍者が府内でも非常に多い地域で、

全校児童生徒数の3分の1以上が何らかの「医療的ケア」を必要としています。今年度、本校の看護師体制は1日あたり8〜9名です。とりわけ臨時技師として雇用されている常勤看護師の日々のストレスは計り知れません。全校的な看護

るため、先の見通しも立ちません。学校看護師を臨時ではなく専門職として業務に値する賃金体系を適用すべきです。

また、本校では教員定数6名分を看護師の配置に充てています。看護師配置を充実させようとすれば、教員数を減らさなければならぬというシステム自体に、制度上の大きな矛盾・欠陥があると言わざるを得ません。定数外で配置できるような法整備が必要です。

これ以上の転用は無理！ぜひとも新校建設を！

枚方支援学校分会 佐々木代議員



今年度、枚方支援学校の児童生徒数は、昨年度より6人減りました。全体の人数が少し減ったとはいえ、もともと300人規模の学校です。今年度も80人近くオーバーしており、昨年度までに転用した教室は元に戻っていません。昨年度府教委が出した「基本方針」ではこうした「過大・過密」の状況に対応できない

のほ明らかで、新校建設が必要で、昨年度は、他校と合同で新校建設に向けた署名活動に取り組みました。地域での街頭宣伝をしたりしました。また、教育関係団体の総会などで協力を訴えました。また、PTA役員と分会役員とで懇談を行い、基本方針の問題点や枚方支援学校の「過大・過密」について話し合いました。今後、PTAとして、通学区域割りに対しての意見を府教委に提出されるそうです。

このような中、枚方支援学校の課題や学校運営に対する疑問を感じて、少しずつですが、新たに組合に入る先生も増えてきています。普段から一緒に関わっている子ども話に加えて組合の話もしてきたことが加入に結びついてきています。運動を進展させ、よりよい学校にしていきたい間に、組合の大切さを伝え仲間を増やしていきたいと思

民主的な職場を守っていきましょー！

東大阪支援学校分会 福島代議員



東大阪支援学校は生活課程の「過大・過密」が問題となっており、「東大阪市に知的障害の支援学校を」という運動を父母とともに長年続けています。近隣に西浦支援学校が建設されましたが、まだまだ解消されていくとは言えません。特に通学区域割りには大きな課題があり、今後も引き続き運動を続けていく必要があります。

ます。高等部から他校へ進学しなければならぬことに関する、生徒や保護者の負担、教員の引継ぎの困難さなどから、「支援学校はやはり小中高の一貫が望ましい」という声が分会ニュースに寄せられています。

学校全体の現状では、様々な面で管理職主導の方針が出されるようになり、特に今年度から部主事、首席を担任から外すという提案が急に出されたことに関しては職場内で大

多くの青年が組合を通していろいろな経験を積んでほしい

青年部 吉松代議員



私自身が沖縄や平和、それから社会に目を向けられるようになったのは、2015年の原水禁長崎大会に参加したからです。次の年の2月には沖縄ツアーに参加し、沖縄の現状をその時をはじめ知りました。この

の長崎、沖縄でのインパクトのある経験を以て以降、もつといろいろなことを知りたい、知らないことは怖いなどと思い、たくさんの活動に参加するようになり、選の支援にも参加させてもらい、やはり沖縄の問題は日本の問題であること、みんなが沖縄を大切にしなければならぬことを確信しました。

青年部では、沖縄の学習だけでなく、『私の鉄板ネタ』と題して自分たちの授業ネタを披露し合ったり、SNSを使ったり、教員採用選考の対策講座を独自に企画したりと工夫をしますが、参加者が固定化したり、数に伸び悩みがあるのが現状です。せっかく素敵な内容でも、もったいない

くって仕方ありません。ベテランの先生方から「こんな学習会があるらしいよ？」と手を引いて連れて来たり、「毎月青年部委員会があるから、学校からひとり、輪番でもいいから参加してね」と声をかけたりしていただけてませんか？

私だけでなく、多くの青年が組合を通していろいろな経験を積めるよう、もちろん青年部も、今後とも活発に活動していきたいと思